

令和2年5月14日

未来への扉 7

校長 平野 雅仁

次の小説の書き出し(冒頭文)は、何という作品でしょうか？

1. 道がつづら折りになって、いよいよ天城峠に近づいたと思う頃、雨脚が杉の密林を白く染めながら、すさまじい早さで麓から私を追って来た。

2.

屋 本 古
ーダンアレコ・トーランコ・ルーカ

こんな字が、ある小さい店のドアのガラスに書かれていた。といっても、うす暗い店の中からそのガラスごしに表の通りを眺めるとき、そう見えるのだったが。

3. 1860年3月9日の夜のことだった。小山のような波がさかまき、雲がひくくたれこめたまっくらなあらしの海を、帆を半分はっただけの一せきの船が吹き流されていた。

正解は…

1. 川端 康成 『伊豆の踊子』
2. ミヒャエル・エンデ 『はてしない物語』 上田真而子・佐藤真理子訳
3. ジュール・ヴェルヌ 『十五少年漂流記』(『二年間の休暇』) 久保田昭男訳 他

これらの作品のストーリー展開に共通している点は、何だと思いますか？

それは、「行きて帰りし物語」ということです。

「行きて帰りし物語」のストーリー展開は、名前のとおり、「この場所(日常)とは異なる向こう側(非日常)の世界に行き、帰ってくる」というものです。

図で表すと、次のようになります。

少年・少女の成長物語

「行きて帰りし物語」とは？

非日常（あちら側）

境界線

日常（こちら側）

主人公

本来の居場所ではない所（異界）で経験を積み、成長を遂げる

あちら側（異界）での成果・経験を携えて帰還する（元の場所に戻るとは限らない）

浦島太郎型 <内→外→内>
村（内）から海の中の竜宮城（外）に出かけて行って、再び地上（内）に帰って来る物語。

かぐや姫型 <外→内→外>
月（外）から来たかぐや姫が地球上（内）で生活し、再び月（外）に帰って行く物語。

境界線は、不安定で、事件が起こりやすい場所
境界線を乗り越えて、成長と変化を遂げる

- ・「少年・少女が大人になる物語」である。たとえば、「田舎（外）から都会（内）に出てきた少年・少女が、様々な苦勞をして一人前の弁護士・外交官になりました」というような物語がこの典型である。主人公は<外→内>と移動することになる。
- ・「都会（内）での非人間的な仕事に疲れた人物が、昔住んでいた田舎（外）で暮らすうちに、子供の心を取り戻して、人間性を回復した」というような物語もある。

それでは、少しだけ補足説明をします。

1. 『伊豆の踊子』は、川端 康成自身の経験を踏まえたうえで書かれています。

ここでは、旧制高校（一高）の学生が、伊豆の旅の途中で旅芸人（大島・波浮の港）の一行と出会い、下田港で別れるまでのお話です。

ここでは、一直線に話が進んでいくようですが、伊豆といえば、天城峠（天城トンネル）があります。旅を通じて、幼い踊子（かおる）に抱くあわい恋心など、旅芸人たちとの交流から学生は、何を感じ取ったのでしょうか？



つづら折りの道



踊子と学生

天城峠

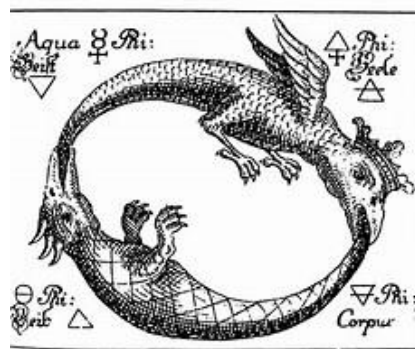


旧天城トンネル

川端康成と吉永小百合



2. ミヒャエル・エンデ 『はてしない物語』や『モモ』、『鏡の中の鏡』は、私も夢中で読みました。まず、本の装丁にビックリしました。また、本を開くと、二色のインクで描かれる二つの世界に知らず知らずのうちに引き込まれ、主人公のバスチアンとともにファンタージェンへの長い旅を始めています。この虚無に飲み込まれようとしているファンタージェン・女王幼ごころの君をバスチアンはじめ、アトレーユ、フッフールは、どのように救済するのか。読んでいて、わくわくドキドキします。そして、バスチアンは、どのようにして、こちらの世界に帰って来るのでしょうか？



ウロボロス



3. この作品の原題は、『二年間の休暇』といいます。あたり前の夏休みだったはずのものが、思いがけないことから無人島での二年間のつらく苦しい生活になってしまいました。日本では、明治二十九年に森田思軒が、『十五少年漂流記』という題名で翻訳して以来、ほとんどこの題名で読まれています。この物語も船が漂流してしまい、離島にたどり着き、少年たちが、再びもとの場所に戻って来るお話です。

物語の舞台の離島は学校の名前からチェアマン島、流れ着いた場所はスクナーの名前をとってスルギ湾、落とし穴森、ニュージーランドをしのんでジーランド川、彼らの故郷からフランス岬、イギリス岬、アメリカ岬・・・。



チャタム島



ニュージーランド東方に、チェアマン島の舞台になる実際の島があります。かなりニュージーランドに近いところにあるチャタム島です。ご覧の通り島の中央に湖があって、しかも淡水湖であるとのこと。島の地形は至って平坦。物語の舞台そのままです。

「チェアマン島」で生活する少年たち一人一人が、さまざまな体験を通じて、学んだことは、「友情」「熱意」「勇気」「協力」などいろいろあったと思います。また、どんな困難な状況でも、みんなで力を合わせれば、乗り越えられることも学んだのではないのでしょうか？

ここでは、『二年間の休暇』 私市保彦訳 岩波少年文庫の最後のところを引用します。

さて、この物語は『二年間の休暇』というタイトルにふさわしいように思われるが、それを示すつぎの結びを、教訓として忘れないでいただきたい。たしかに寄宿学校の生徒たちが、このような状況で休暇を過ごすような境遇におちいることは、まずないだろう。しかし一どの子どもたちにも知っておいてもらいたい—いかに危険に満ちた南極であろうと—秩序と熱意と勇気をもってすれば切り抜けることができるのである。とりわけ、〈スキル号〉の少年漂流者たちのことを思い、次のことを忘れないでほしい。少年たちは試練によって成熟し、生きるためのきびしい修練を積み重ね、帰国したときには、下級生たちはほとんど上級生のように成長し、上級生はほとんどおとなのように成長していたのである。

今日は、皆さんに「行きて帰りし物語」関係の本を紹介しました。

この他にもスティーヴン・キングの『スタンド・バイ・ミー』や宮崎駿の『千と千尋の物語』等は、少年・少女の成長物語です。冒険や旅・試練を通じて、人は大きく成長します。

よく考えてみると、今のこの状況も一つの試練です。日常とは、異なる世界を生きています。この状況が変わって、また、日常に戻った時に私たちは、どのような世界を描かなければならないのでしょうか？

みんなで力を合わせて、新しい世界・未来を創っていきましょう。